

スマートフォン利用行動の機能に関する心理学的研究

教育学研究科教育学専攻 3615003 谷山智哉

I. 問題と目的

スマートフォンの過剰利用には、様々な心理・社会・身体的な影響が伴う。本研究では、スマートフォンの過剰利用を嗜癖の観点から捉え、その心理学的特徴について研究する。

II. 研究1：スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度の作成

1. 目的：スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度の作成を目的とする。
2. 調査1 自由記述による項目収集
 - 1) 方法：「Yahoo!クラウドソーシング」の利用者150名を対象に調査を行った。ここ1ヶ月でスマートフォンを使った状況について自由記述で回答を求めた。
 - 2) 結果：調査によって得られた750件の記述についてKJ法を参考に分類し、その結果をもとに、スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度の項目候補を38項目作成した。
3. 調査2 スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度の因子構造
 - 1) 方法：「Yahoo!クラウドソーシング」利用者400名を対象に調査を行った。スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度原案について5件法で回答を求めた。
 - 2) 結果：因子分析（最小二乗法、プロマックス回転）を行った結果、「先延ばし」、「気晴らし」、「暇つぶし」、「関係希求」、「実利的利用」、「娯楽」が抽出され、31項目6因子構造のスマートフォン利用行動の心理学的機能尺度が作成された。

III. 研究2：スマートフォン利用行動の心理学的機能に関係する要因の検討

1. 目的：スマートフォン利用行動の心理学的機能と関係する要因の検討を行う。
2. 方法：「Yahoo!クラウドソーシング」を利用している200名を対象に調査を行った。①UCLA孤独感尺度、②日本語版TIPI、③WSDS、④アテネ不眠尺度、⑤HAD、⑥時間管理尺度、⑦MWQ、⑧スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度のそれぞれに回答を求めた。
3. 結果：重回帰分析を行った結果、スマートフォンを用いた先延ばしは依存度を高め、スマートフォンを用いた娯楽は、不安、抑うつ、不眠を和らげることが明らかになった。
4. 考察：スマートフォン利用行動の心理学的機能には、適応的側面と不適応的な側面が存在することが示された。

IV. 総合考察

本研究により、スマートフォン利用行動の心理学的機能尺度を作成することができた。そして、スマートフォン利用行動の心理学的機能に関係する要因が明らかになった。この知見は、スマートフォン嗜癖を理解するための一助となるだろう。